

第一回 鎌倉文学館こども文学賞 作品集

応募総数

小学生の部 147作品

中学生の部 574作品

審査委員

三木卓（作家・詩人）

角野栄子（童話作家）

富岡幸一郎（文芸評論家・鎌倉文学館館長）

選考を終えて

三木卓

第一回鎌倉文学館こども文学賞は、小学生の部も中学生の部も沢山の応募があり、手ごたえあり、でした。

とくに小学生の部は、元気がよく、わたしの意表をつく発想にもしばしば会えて、楽しんでしました。

大賞の苗村奈々愛さん「家出風」は、深刻ともとれるものを、奔放にあかるく描いていて、こどもらしさを十全に發揮していました。

中学生の部は、成長した分だけ深い感情や認識がくわわっています。大賞の実光由里香さん「インターネット」は、パソコンに夢中になっていて、その空間からもとの現実にもどるときに感覚をとらえています。

詩を書くというのは、ふしぎな自分への旅です。自分はこんな気持ちで生きているのだ、こんなふうに見世界を見、感じているのだ、ということに、作品を書きあげてから、今さらのように気づいたりします。それは一步一步生きている自分の確めであったり、これからの自分を考える足場だったりします。

第二回には、もっと沢山のみなさんが、参加して下さいますように。そして、まずは審査委員、そして読んだ人々をよろこばせてくれる、おもしろく、すぐれた作品をよせて下さいますように。

こども文学賞 大賞

小学生の部 大賞 「家出風」

滋賀県栗東市立葉山小学校3年 苗村 奈々愛さん

風すけと弟の葉すけはなかよく遊んでいた

父ちゃんがツボをわった

母ちゃんが家出した

父ちゃんは風すけに

「おまえがやったんだろう」

といいがかりをつけた

「こんなやつはこの家から出ていけ」

とどなりつけた

風すけは家をとび出し

風広場までかけてきた

すると

風がまいあがり

とうめいになったと思うと

「ここは風の国だよ」

と母ちゃんの声が聞こえた

「母ちゃん、なんでここにいるの？」

母ちゃんは

「ここは家出した人が来る所なんだよ」

と言った

でも風すけは風になってしまったのがとてもくやしかった

その後すぐ葉すけが風になってまいあがってきた

「兄ちゃんと同じことを言われたんだ」とないた

それから風すけと葉すけは母ちゃんと同じ風の国の仕事をする

日本中をまわる天のかんしカメラだ

ときどき父ちゃんの家を見ると

ひとりぼっちでツボに人つ当たりしている

風すけたちはわらいながら

空をかけていく。

中学生の部 大賞 「インターネット」

鎌倉女学院中学校3年 実光 由里香さん

青く光る

画面にとびつく

気になる言葉を

たたきこむ

返事がくる

こんなことがあるんだ

こつちを見てうなづく

あつちを見てにやける

そつちを見て驚く

気がついて

周りを見ても

何もない

小学生の部 入賞

入賞 「つきのうさぎオリンピックピック」

横須賀市立森崎小学校1年 國永 くになが 新さん あらた

つきのオリンピックピックは、うさぎがもちをつくのです。

金メダルは、もちを一じかんがまんしてついた人。

ぎんメダルは、いつかいあせをふいたひと。

どうメダルは、なんどもあせをふいたひと。

入賞 「よぞらのほし」

横浜市立さちが丘小学校1年 橋本 はしもと 茜さん あかね

よぞらに ほしがうかびました

よぞらにはいりまらなくらいの

ほしでした

てがとどきそう

ごはんのせてみたい

たべたらどんなあじがするのかな

入賞 「つぼみのえ」

東京都練馬区立田柄小学校1年

林

まひろ
菜尋さん

つぼみのえを

かきました

それから

それをそらにむけて

もちました

きれいな

チューリップのはなに

なりました

入賞 「森の中の文学かん」

静岡県沼津市立第一小学校2年 高橋 たかはし ひかりさん

せみしぐれ

森の中の文学かん

友だちのウーフに会いに

入口でむかえてくれたのは

見知らぬおじさんのくび

「ロマン・ロラン」

ママが教えてくれた

「ジャン・クリストフ」を生んだ人

毎ばん読んでもらってる

ジャン・クリストフも私の友だち

いじめられてもいじめられても立ちむかう

「一つとしてつまらないものはない。」

本の中の友だちと

つまらないものぜんぶ

楽しくかえる

遊びにかえる

まほうをかける

ウーフとジャン・クリストフと

文学かんです新しくできた友だちと

せみしぐれ

スキップする

こもれび

きらきらかがやくゆめ

私はぜったいつかんでみせる

入賞 「大すきなピアノ」

鎌倉市立七里ガ浜小学校3年 石田 いしだ 七海 ななみさん

ピアノは、けんばんをひくと、

中のきかいがげんをひいて音が出る。

ピアノは、けんばんが88けんもある。

ピアノは、がくふという紙に書いてある音ぶのとおりにひくと、

きよくがえんそうできる。

ピアノは、ちょうりつという音のてんけんをしないと

音がわるくなってしまう。

ピアノは、ペダルが3つついている。

わたしは、一番右の音がのびるペダルをよくつかう。

ピアノは、けんばんをひいたかんじがすこしおもしろい。

ピアノは、いっしょうけんめいれんしゅうしないとうまくならない。

ピアノは、

きれいにひこうと思えば、きれいに聞こえるし、

ざつにひこうと思えば、ざつに聞こえるし、

楽しくひこうと思えば、楽しく聞こえるし、

かなしくひこうと思えば、かなしく聞こえる。

わたしはピアノを毎日れんしゅうしている。

しょうらいのゆめはピアニストだ。

入賞 「ツタンカーメン」

鎌倉市立小坂小学校3年
徳田 莉子さん

ツタンカーメンてんにいったよ
三千年も前に生きていた人だよ
十九さいでなくなったよ

ツタンカーメンの半しんぞうは
少年で目が大きくてかっこいい
アイドルみたいに かがやいていたよ

なくなったときは黄金のひつぎに入ったよ
三三三百年も、ひつぎでねむりつづけたよ
ミイラになってもたましいは生きてるって

三千年たっても生きている
すごいことだ
どんな気分だろう

今のせかいをみてどう思うだろう
びっくりするかな
三千年前の方がよかったかな
金色にかがやく いすにすわって
色とりどりの ほう石にかこまれて
かみさまになったツタンカーメン

わたしがしんでも
ツタンカーメンは、えいえんに生きる
ふしぎだなあ
えいえんに生きるよ

らるるるるるるるるるる

いっぽいあうて

たいへんだなあ

入賞 「サッカーボール」

鎌倉市立山崎小学校4年 石塚 いしづか ほなみさん

ヤット、ツカワレルトキガキタ。

アツ。ジコシヨウカイヲワスレテタ。

オレ、サッカーボール。

カワイイオンナノコガオレヲカツテクレタ。

ソノオンナノコハ、キックガツヨイ。

シヨウジキスゴクイタイ。

デモ、ツカワレルコトハ、ウレシイ。

ダンダンオレハ、キズガツイテイッタ。

アルヒ、オンナノコハ、アタラシイ

ボールヲカッタ。

オンナノコハ、ソノボールバツカリ

ツカウヨウニナッタ

オンナノコハ、

アンマリツカツテクレナクナッタ。

スゴク、クヤシイ。

デモ、アルヒカラオンナノコハ、

イツパイツカツテクレタ。

ナゼダロウ。

モウイツコノボールヲミタラ、

オレヨリキズガツイテイタ。

入賞 「土と水のまほう」

藤沢市立鵜南小学校5年 伊奈 東子さん

ゴーヤの種は おばあさん

ゴボゴボのしわ

ガチガチのからだ

ぎゅうと世界を

とじこめて

だまって かたく 怒っている

それが今は どうだろう

ビュウビュウ のびて

のびていく

先へ 先へ まだたりない

おどろ子みたい くるくるり

きつと

月をつかまえるまで

止まらないんでしょう

入賞 「おおきなおじいちゃん」

鎌倉市立玉縄小学校5年 広実^{ひろざね} 景^{けい}さん

「うー。」

おじいちゃんがうめいた

どうしたかと思ったら

たおれこんでいる

おいしよ、どっこいしよ

おじいちゃんはぼくのカじゃ起こせない

ねえちゃんをよんでくる

おいしよ、どっこいしよ

二人で力を合わせたら、おじいちゃんを起こせた

おじいちゃんにはやととわらって

「センキューベリーマッチ。」と言った

ぼくもにやととわらって

「ウエルカム。」と言った

入賞 「ぼくの家出」

鎌倉市立第二小学校5年 矢崎 表さん
やざき ぼく

ぼくは、家出した

ぼくは、家出してやった

八幡宮まで走っていった

白旗神社までいった

ハトをけちらしてやった

馬鹿、馬鹿。

それから、池を見ていた

スッポンのポン太に会った

「お前、馬鹿かよ」

首だけによきとつき出して

ポン太が言った

やっちゃったよ。そうだね、馬鹿だね。

お母さんがどうしているか、

そうっと家に偵察にもどった

木戸を開けて、足音をしのばせて、

便所の外から耳をすませた

お母さんも、いらいらと

そうじを始めたようだ

もう一度、八幡宮へもどった

どうしよう、どうしようかな。

カメがいたので、

ポチャンと小石を投げた

カメは岸に上がってきた

「エサ、くれるの?」

コイもよってきた

ゆらゆら、ゆらゆら

やっぱりもどろろ

まよったけれど、

「ただいま」のかわりに

ガラスと開けて大きな声で言った

ぼくは、この家にひつようですか！

中学生の部 入賞

入賞 「コーヒー注ぐのは」

鎌倉女学院中学校1年 伊藤 理佳子さん

日々の静い

ぶすくれる私

怒鳴る

後悔ばかり残る

互いに傷つけ合って

互いに涙しあって

あの地獄のような日々は

明日なんてあつたらうか

沈黙に包まれた食卓は

息もできないほどに

私はそっと

甘い甘いコーヒーを

カップに注ぐ

甘いつつぶやかれると

私は胸をなでおろす

コーヒーを注ぐのは

一人だときびしいから

一筋の光が欲しいから

空になったカップが

満たされるように

入賞 「小さな種」

鎌倉女学院中学校1年 金井 優亜さん

心の中の小さな種

嬉しくなると花が咲き、

悲しくなると種にもどる。

心の中の小さな種

楽しくなると花が咲き、

つかれるとまた、種にもどる

これをくり返し

大人になり、

小さな種は

美しい花になる

入賞 「ランドセル卒業」

鎌倉女学院中学校1年

作宮 さくみや

澄香さん すみか

ジリジリ、ヒューン、バーン、バーン
とんぼ花火に、線香花火
いとこと兄と買いに行った

赤いランドセルの時から
ずーっと、みんなで作っていた
はやく、はやく、と言いながら

今年は少し、ちがうんだ
おばあちゃんは、四本足のつえを
二本もついた

そして、いすに座ったんだ

みんな変わっていくのだ
そして私も変わったのだ

入賞 「君色」

大阪府泉南市立一丘中学校1年

森中

美咲さん

「帰り道が分からないよ。」

真っ白な世界で、帰り道だけを探している。

真っ白で何も無い此処だから

真っ白に紛れた君の事を

見つける事なんて出来ないよ。

絶望くろいろだけ持っても仕方無いよ。

怒りあかいろだけ持っても悲しいだけ。

不安あおいろだけ持っても笑えないし。

世界キャンパスは一色じゃなくていいんだ

「君色」きみいろに染まれば それでいい。

何回染まり直してもいいよ。

たまには、最初から描き直してもいい。

此処キャンパスは君の世界。
だから

「帰り道なんて探さなくていいよ。」

君が

君に会いに行くための道標は

今、描かれたばかりだから。

入賞 「約束の丘」

鎌倉女学院中学校1年 山本 絵美子さん
やまもと えみこ

「一！二！三！四！……」

数字が、空へ消えていく。

別れの前日に、三十三人が集まった、
思い出がつまった、この丘。

笑顔になりながら、

泣きそうな顔になりながら、

それぞれが、それぞれの思いを抱き、
それぞれの出席番号を叫ぶ。

六年間、様々な思いを抱えて、
登ってきた、この丘。

ほとんどの人が、四月からの、
新しい生活をする中学校が、
見える、この丘。

それぞれが、いろいろな思いで、
見る、この丘。

それぞれの、新しい未来への、
背中押しをしてくれる、この丘。

最後に、もう戻れない、楽しい過去を、
振り返った、この丘。

どんな思いで、この丘を、
皆は見ているのだろう。

「缶蹴りやろうぜ！」
この言葉で、皆に笑顔が咲く。

いい音をたてて、青く澄みきった空へ、
高く舞い上がった缶。

あの空の向こうの、私達の未来は、

どのようなものだろう…

誰かが、そう思った気がする。

「またいつか、ここに集まろう！」

そんな約束をした、この丘で。

入賞 「夕日の見える丘で」

鎌倉女学院中学校2年 井出 凧砂さん

何の気なしに

外へ出てみた 午後五時ごろ

お気に入り

ながめの良い場所から ひとり

夏が背を向け 行ってしまおうのを

不思議な心地で 見送った

入賞 「未来へ」

横浜国立大学附属鎌倉中学校2年

多田 雄一さん
ただ ゆういち

空を見るとき、いつも思う事がある

空と僕は似ているのではないか

なぜなら、一日として同じ空はないから

そして僕も、一日として同じ僕はいない

僕も常に変化する

身体的、精神的、様々な要因により

昨日の僕と今日の僕は違う

毎日の僕の変化が進化となるように

僕は今日を精一杯生きる

空と同じように、僕の人生にも

晴れの日も、雨の日も、嵐の日もあるだろう

どんなに荒れた天気の後でも

必ず青空が広がるように

僕に起こる様々な困難も

乗り越えた後に

僕は進化するだろう

太陽も雨も大地の恵みとなるように

良い事も悪い事も、僕にとって糧となる

僕に起こる事で、何一つ無駄な事はないと

僕は気づき始めている

困難に出合ったときは

静かに嵐が過ぎ去るのを待ち

機会に恵まれたときは

蓄えた力で邁進しよう

そして僕は

僕の変化が進化となるように

未来に向かって

今日を精一杯生きよう

入賞 「夏と秋の間」

鎌倉女学院中学校2年

田中

夏生さん

朝のすこし肌寒い空気

ベッドの温いフワフワ

タオルケットのまだらな温度

起きて背中に感じる爽快感

昼のまだ夏を感じる暑さ

くせつ毛のはねたモフモフ

Tシャツをぬらす汗

エアコンの冷たい人工の息の罪悪感

夜の部屋を吹き抜ける涼しい風

肌にくっつくパジャマのベタベタ

風に浮く使いかけのティッシュ

雨の音とにおいの高揚感

黒でも白でもない灰色の季節

夏の残すジワジワ

秋の持つてくるサラサラ

これが私の晩夏早秋、枕草子

入賞 「朝限定の強力磁石」

鎌倉女学院中学校3年 中山 なかやま ひかりさん

リンリン！！

バタバタ！！

トントン！！

とおくのほうはにぎやかだ

リンリン！！

おきたの？

もう朝よ！！

だれかがわたしをよんでいる

リンリン！！

リンリン！！

わかってる

今日は学校がある

わかってる

今日はテストもある

そういえば提出物もあったかな

わかってる

でも、わたしのめに強力な磁石がついてはなれない

入賞 「二人の女性」

鎌倉女学院中学校3年
三浦 明莉さん

銃声が

響く異国の片隅で

一人の女性が亡くなった

私たちが

知らない現実^{いま}を伝えるべく

一人の女性が亡くなった

犠牲者の

無言の思い届けようと

一人の女性が亡くなった

いつまでも

続けて何が残るのか

こんな事

続けて何が残るのか

いけないと

分かっている

それでも

続けて何が残るのか

くみとろう

彼女の思い

平和の一步

踏み出すために

発行日
編集・発行

平成24年11月11日

鎌倉文学館指定管理者

鎌倉市芸術文化振興財団・

国際ビルサービス共同事業体

鎌倉文学館

鎌倉市長谷 1・5・3